

学校だより

プラタナス



令和3年3月4日(木)

No.42 市川市立市川小学校
校長 蜂須賀 久幸

<https://ichikawa-school.ed.jp/ichikawa-sho>



「残り姿」に気を配れる人でありたい

以前、ある県立学校のおたよりの冒頭にある、校長挨拶を読ませていただいたとき、文中の『残り姿』という文字が目にとまりました。「残り香」や「後ろ姿」なら知っていますが、その時は初めて知った言葉だったので、すぐに調べてみた記憶があります。

『残り姿』とは、「人がそこになくなって、人がいたところには、その人の心の姿が残る」という意味です。例えば、昇降口の靴はどうでしょう？かかとがきちんと揃っている外靴や上履きもあれば、雑に置かれたもの、時には片方だけでもう一方は下に落ちているといったことも少なくありません。脱いだ靴をそろえるというのはマナーといえますが、その子供が美しいというよりその立ち振る舞いが美しいといえるのではないのでしょうか。昇降口だけでなく、掃除用ロッカーや特別教室の椅子や戸棚など、次に使う人への心遣いが大事だといえます。見る人を不快にすることもありません。そういう私は、玄関で靴の向きを変えてきちんと揃えることだけは心がけています。

このように考えると、学校生活や家庭生活の至るところに『残り姿』があるように思えます。それが無意識の行為であれば、なおさら素敵だと思います。『残り姿』を「人の目に残る自分の姿である」と考えれば、教室から図書室へ行くとき、あるいはさようならをした後の教室の椅子や机はどうなっているか確認を怠らないようにしたいものです。また、やむを得ず料理を残したとき、器の中はどんな姿を表しているでしょう。捨てたごみ



の姿を気にしたことはあるでしょうか。脱いだ服は？学校を含め、多くの人を使用する場所のトイレは？上がった後の風呂場は？

私たちは、普段の生活の中で様々なことを試みます。そして、何かをやった以上、何かが残ります。そのときの自分の『残り姿』はどうか、人の眼に自分の『残り姿』はどう映っているか、少しでも気を配ることを大事にしたいと思います。

「そんなことばかり気にしていたら疲れてしまう」と思うかもしれません。でも、これは「おもてなし」と同じではないでしょうか。3月を迎え、今年度も残りわずか。6年生は卒業まで11日の登校を残すばかりです。4月につなぐために、大人も子供もその行動が人の眼に映えるものか振り返りたいと思います。そして、できていなかった自分からの卒業です！

「難病で視力を失った和歌山市職員の男性(58)が10年以上にわたり、地元の小学生に助けられながらバス通勤を続けている。ある女子児童に声をかけられたのが始まりで、その児童の卒業後も後輩から後輩に『善意のバトン』が繋がれてきた。1月、児童たちと再会した男性は『温かい手で支えてもらうのがうれしかった。不安だった通勤が楽しい時間になった』と笑顔を浮かべ、児童たちも『私たちも毎朝が楽しみになりました』とにこやかに答えた。」(1/26 読売新聞オンラインより引用)

「小さな助け合い」をテーマにした作文コンクールで最高賞に選ばれた作品を紹介した内容です。子供たちには、「誰かの支えになる」という行為を自分の経験から振り返ってみたり、「親切のバトン」と同じように、市川小で脈々と受け継がれる「バトン」って何かを考えてみたりしてほしいものです。

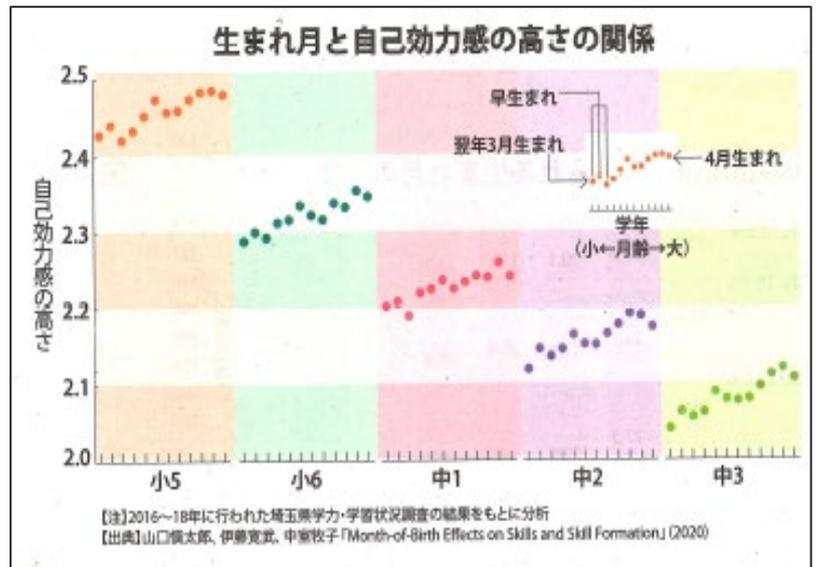
早生まれの子は不利だというのは本当なの？



朝日新聞EduA(1/10 付)に特集が組まれていたので興味深く読みました。それというのも、私の子供は二人とも早生まれだったからです。

東京大学大学院・山口慎太郎教授によると、早生まれの影響は、想像以上に長く残るといい、入学した高校の偏差値に有意な差があったそうです。ですが、体力はいずれ追いつき、学力の差も年々縮まります。ただ、なかなか埋まらないのが「最後までやり抜く」「感情をコントロールする」「他人と良い関係を築く」などの『非認知能力』と呼ばれる部分だというのです。

学校生活では、テストの成績など『認知能力』にかかわる部分で評価される傾向がありますが、社会的に成功している人は、『非認知能力』が高いことが分かっているようです。例えば、「自己効力感」(目標の達成に必要な行動を選び、計画どおりに成し遂げられるという自信)の高さを比べると、一般的に学年が進むごとに自己効力感は下がりますが、年齢を重ねても早生まれと遅生まれの差が縮まっていないことをグラフ(上)が示しているのです。



子育てに当たっては、この『非認知能力』を高めることにも力を注ぐことが大切であると山口教授は締めくくっています。

一方、白梅学園大・無藤隆名誉教授は、『非認知能力』を育むために異年齢と交わる機会を増やすことを訴えています。『非認知能力』は、主に幼児期から小学校低学年くらいまでの間に、みんなで遊んだり活動したりする中において、「目標の達成」「他者との協働」「感情のコントロール」の全てが求められる場面で育つといいます。遊びの中では、役割を分担したり、リーダーとフォロワーが入れ替わったりと、役割が固定化されないようにすることも大切なようです。

私たち指導者も、早生まれの子は成長に差があることを認識したうえで、敢えて意見を言わせたり役割や出番を作ったりして、その子の可能性を引き出すことが求められます。また、普段の生活でも、年下の子と交わる機会はリーダー性を発揮する場になるかもしれません。

朝日新聞 2/5 掲載の益田ミリさんのエッセー「大人になった女子たちへ」に、幼稚園の頃のことが書かれていました。「先生は、1月生まれの私をお荷物に思っていたに違いない」と。先生の手伝いをする人を募ったときに手を挙げたが、みんながやるようにはできなかつたらしいのです。すると先生に「できないだったら、やるって言わないの!」と言われたと綴っています。先生の忙しさに理解を示しながら懐古しています。また、こうも書いています。「家に帰れば小さな妹がいた。かわいい妹が自慢だった。あの頃の私にだって誰かを大切に想うことができていたのである」と。

この短い文章に、上述した二人の教授のおっしゃることの一部が見え隠れするとともに、教員としての言動の大切さを示唆しているように思います。

学校では必要な経験を積む機会を設け、時間はかかっても子供の力を引き出す環境づくりを目指したいと考えます。

